＜教育長だより 13 号：杁差岳朝日に映えて　令和 6 年 10 月 21 日＞

希望のたいまつ

～新潟県教育の日（11 月 1 日）に寄せて～

教育長　津野庄一郎

「関谷学園」のことです。今から 78 年前、日本全国で初めて小学校 6 年・中学校 3 年の 6・3 制を柱とする新しい教育に取り組んだのが私たちの関川村です。関小学校 6 年生の秋だったと思います。校庭に大きな「日本六三三制発祥の地」の石碑が建てられ、その除幕式を仲間と見守った記憶があります。当時は「それがどうした」という程度でした。

平成 27（2015）年 1 月 1 日、戦後 70 年の節目、新潟日報は一面トップに「県北に咲いた自由」というタイトルで「関谷学園」を大きく取り上げ、以降 9 回に渡る連載を通じて、学園の詳細を知りました。学園の特色は、小学校と中学校で行われる教育内容をつなぎ合わせ、男女が一緒に机を並べて学べるようにしたこと。午前は教科の授業、午後はクラブ形式で自由に学習に参加して、新聞記事をもとに討議したり、グループ作業、調査研究、体育運動、実験実習をしたり…わくわくする授業がたくさんありました。また、算数や数学は子どもの理解に合わせてクラスを編成したり、日本語を一切使わない英語クラブや電気クラブの活動があったりしました。この新しい教育に賛同した優秀な教員は全国から集められ、当時学園の卒業生は「学校はとにかく楽しいところ」と語っています。それは探究・体験・対話・個別最適・協働的な学びを重視する「令和の日本型教育」と重なります。

学園の設立には、渡邉家の渡邉萬寿太郎（ますたろう）当主（旧関谷村・関川村村長・東京大学卒）の、平和で豊かな教育村の構想と身を削る支援がありました。国の重要文化財渡邉邸には、「敗戦から国の復興を図るには、まず一郷一村（いちごういっそん）が立ち上がることだ。（中略）働きながら学び、学びながら働くことを取り入れることだ。（中略）自分は富や財を残すことに拘泥（こうでい）しない。渡邉家がこの地に存在したとの歴史さえ残ればそれでいい」との言葉が掲げられており、戦争で荒廃したこの国を、教育の力で立て直すという真心が胸を打ちます。

戦後間もない農村における実験的とも言える取組は、わずか 9 か月で幕を閉じ、新制小中学校へと移行していくこととなりますが、その「希望のたいまつ」は、羽越水害、学校の統廃合、合併によらない村づくりと幾多の困難を乗り越えて今にあります。このたいまつの灯りが、村民とともに小中連携の礎として、各校の創意工夫として受け継がれ、よりよい生き方を求めて学び続ける人、地域社会の発展に尽くす人、失敗を恐れずに挑戦する人を育てる力となることを切に願います。

新潟県教育の日。それは少子化にあらがい、明日の未来を担う子どもたちのために、私たち一人一人、何ができるかを考える機会でもあります。

【写真】関川小学校にある「日本六三三制発祥の地」の石碑